

黄砂（こうさ）吹く国から

（一）

ホテルの一七階の部屋から見渡す眼下は黄海（こうかい）から湧きおこる煙のような海霧に混じって、大地に堆積した黄砂（こうさ）が白く舞っています。

隣接した空き地では、古い建物の取り壊し工事が着々と進められています。赤茶けたレンガの建物は鉄骨がむき出しになって、蜂の巣のように同じ造りの部屋が密集した各層は、抜け殻となつて崩れかけています。むろん人影はありません。

こうした工事は市街のいたるところで進められていて、青島の街は各所でうなりをあげる重機の音とともに、けたたましい自動車のクラクシヨンや町の人たちの喧騒で活気にあふれています。日本の街のように人はただ無言で黙々と歩くのではなく、ここでは言い争いのように聞こえる会話を交わしつつ、人々にはぎやかに、無秩序とも思える群れになって街路を往來します。

山東省は中国で二番目、およそ九千百万人の人口をもつ、ほぼ日本一国に匹敵する巨大な省。

日本の九州や韓国・済州島を東に見て東シナ海を北上すると、黄海に角（つの）のように突き出た山東半島の西南のつけ根に港都・青島（チンタオ）市があります。

人口はおよそ七百万人。青島をそのまま中国大陸の西へ進むと黄河流域の省都・済南市へ。山東省は中国随一の豊かな農産、海産をもつ地であり、とりわけ胶州湾という絶好の避難湾を持つ青島は、一九世紀後半から清朝政府によって軍港としての整備が進められました。東シナ海を北進し、朝鮮半島の西海岸都市や渤海に臨む大連や天津を目指す船舶は、この山東半島のつけ根にある要港・青島の監視を逃れることができません。

第一次世界大戦での対ドイツ戦、続く日中戦争における日本が、山東省の持つ豊富な資源のみならず、地政的に極めて重要な意味をもつこの青島に真っ先に着目したことはいうまでもありません。

黄海を臨む青島の海浜を通ると、第一次大戦前のドイツ占領時代に残された赤い屋根のドイツ風の建物が今も数多く残っていて、今でも北京から

訪れる中国政府要人たちの避暑地として使われています。

二 七年十二月。広島から青島に運びこまれた食品焼成プラントの据え付け工事を見届けた私は、青島市街の中心地、香港中路にそびえるこのホテルの最上階に移りました。

このホテルもまた、今回の顧客である中国財閥系グループの一部門を成す企業です。ホテル幹部の配慮で、私は東京のホテルのシングルルームほどの料金で、四部屋もあるスイートルームに案内されました。

チエツクインの後しばらくして、ホテルの女性支配人が山盛りの果物が入ったバスケットを手に私の部屋に現れました。

「御社と我々のグループ企業との今回の合作事業の成功を祈っています。どうかあなたのご助力をお願いいたします。ご不便がありましたらなんなりと」

と、英語で挨拶を述べて立ち去りました。

慇懃（いんぎん）で、それでいて人心を逸らさない、したたかな中国商人の平素の仕事ぶりを垣間見た思いでした。

すでに年の瀬。社会主義の国、中国の街にあちこちからクリスマスソングが聴こえてくるのがなんだか不思議に思えます。

部屋のデスクに向かつて私は業務日誌を綴りながら、この商談の発端から、つい数日前まで続いた工場での最後の仕上げ工事までの記憶をたどっていました。

\*

青島の胶州湾近くの広大な「青島経済開発特区」内に中国財閥系グループ企業と日本の大手食品会社とによって設立された、日中合弁の食品製造会社があります。この会社の工場へ私の会社の「食品連続焼成プラント」を輸出する商談が始まったのは、春のまだ浅い頃のこと。

基本契約が締結された後、およそ四ヶ月の機械の製作期間を含めて、完工予定は十二月という長丁場の仕事です

「冷凍お好み焼」など鉄板で焼く調理食品を、移動する多数の鉄板上で連続して焼きあげる一連の焼成プラントは、長さ十五メートル、焼成機械に連結する付帯設備を含む総重量は約四トン。

プラント一式は、広島での設計、製作、完成後の試運転・調整ののち、いったん解体され、横浜港から海路、青島へ。揚陸後そこからさらに経済

開発特区内に陸送され、巨大な工場の一角に据え付けられます。ここで再び機械の再組み上げと試運転・調整ののち顧客企業に引き渡されます。

「お好み焼」を連続的に焼き上げる機械から自動的に送り出された製品はベルトコンベアで運ばれ、急速冷凍装置のなかへ。そこで瞬時に凍結された製品はエックス線による透過検査などを経たのち、包装ラインを経て商品として出荷にいたります

プラント製作、据え付け工事だけでなく、当社スタッフによる「お好み焼」などの量産・運営ノウハウの供与も「売買契約書」の契約条項に明記されています。

プラント一式の日本での製作作業と並行して、現地の工場では中国側企業による内装工事、電力工事、電気配線、エア―動力配管、ガス配管などの工事が続けられました。

暦（こよみ）が晩秋から師走に移ろうとする頃、日本から到着した何トンもの資材が、大掛かりな重機によって工場に搬入され、日本側スタッフ立会いのもとでいよいよ輸出梱包の開梱（かいこん）作業が始まります。

日本側工事スタッフの青島到着直前までの情報とは大きく違って、中国側企業による作業は大幅に遅れてしまっていました。

一週間の予定のプラント組み立て、据え付け工事は、立ち上がりから日程の見通せない状況に立ち到りました。

遅れている工程をなんとかとり戻そうとあせる、日本の技術者たち。ゆったりとした動作で、しかもどう見てもねじれたままの柱をむりやり溶接する作業を繰り返す、中国の内装業者。ガス本管の連結を待ちわびる日本人技術者を尻目に、配管の工事人たちは床に座り込んで、日本から運び込まれた焼成機械を物珍しそうに手で触りながら、仲間たちとあれこれ評定を始める始末。定時になると彼らはさっさと工具をしまいこんで、

「じゃ、きょうはこれで。次は役所の検査が通ってからね。検査はいつになるかわからないけど」。

朝鮮族、モンゴル族も混ざる中国人スタッフのなかで、日本人スタッフはわき目もふらず機械の周囲を巡って調整にかけ回り、工場内に緊迫した広島弁が飛び交います。

その日の仕事を終えたのち、開発特区内にあるホテルの一室で、青島ビールや紹興酒を酌み交わしながら話題にのぼるのは、中国人事業者たちの仕事ぶり。

図面や工程表をにらみながら、黙々と機械に向かい合う日本人技術者たちには信じられない光景に映ります。

「 能率、いうことを少しは考えてもらわんとのお。正月も近いことじゃし、わしらもいつまでも待つとるわけにはいかんけえねえ。それにあの工場の床のレベル（注・水平度）、どう見てもひどう狂つとる。それも心配じゃ  
と、機械の調整を担当する技術者。

仕事の後の解放感も手伝って、その日の出来事が面白おかしく披露されます。

「 じゃがねえ（注・でもねえ）、三十秒とたがわずに新幹線がホームに入ってくるのが当たり前の日本を基準にして、ものを考えちゃいけないのじゃないか？ 『郷に入らば郷に従え』という言葉もあるじゃないか。彼らも我々日本人の仕事ぶりを目の当たりにして、きつと何か感じることもあると思うよお。寒いなかで大変な仕事じゃとは思うが、我々の納得のいく仕事をやって広島へ帰ろうや  
」

私の精一杯の部下たちへの慰労の言葉で、その夜の小宴はお開きとなりました。

テーブルに散らかった酒瓶やコップを片付けながら、私はこの三月、広島私の会社を訪れたアフリカ人研修生達のことを思い出していました。

まだ山には雪も残る頃、ガーナ、ザイル、ザンビアなど南アフリカ七ヶ国の公務員たち二十人ほどが、日本外務省の開発途上国支援事業の一環として、私の会社へ産業研修にやってきました。その時の、或る小国の産業奨励を担当する政府公務員の言葉が耳を離れません。石炭のように艶（つや）やかで漆黒の肌をもつ彼は、低い声のクイーンズイングリッシュでつぶやきました。

「 豊富な埋蔵資源を持ちながら、わが国に生まれてくる新生児の四割はエイズに犯されています。国民の平均寿命は三八歳、町は失業者であふれています。今、私たちに必要なのは日本のマツダのような最先端の生産手段ではないのです。一枚の鉄板があればいい。その鉄板を道具にして、わが国の農畜産物を使って、国民の二人か三人でもその日の暮らしを成り立たせることはできないか。そんな手法や起業の方策を私たちはあなた方から学んで帰りたいのです」。

翌日昼、いつになるかもわからないという役所の検査をホテルで待つ我々に、工場から召集の報せが届きました。

不思議なことに工事中の現場は、前日まで残されていた多くの課題は中国側によってすっかり片付けられてしまっているのです。そして見渡すばかりの工場の床や壁は、白衣を着た圧倒的な人の群れがどこからともなく

結集してきて、それぞれが手にもったタワシと薬品で磨き上げ、またたぐ間にゴミひとつ無い衛生的な食品製造工場が目の前に出現しました。

中国政府が重要国策として強力に推進する経済開発特区内における合併事業では、「(地方)役所の検査」はどうやら無きに等しいものようです。

同じ地球のなかにありながら、それぞれ置かれた状況があまりにも異なる日本、中国、そしてアフリカの国々。その国旗のもとで、無数の民がそれぞれ異なる現実に直面しながら日々を送っていることを思いました。

忘れられないホテルでの出来事がありました。

ある日の朝、工場での約束の時間が迫った私は、ホテルの洗面室で洗濯をしかけた下着や靴下を、陶器製の洗面台のなかにおいたまま部屋を飛び出して、車の待つ玄関へと急ぎました。

夕刻、部屋に戻ってみると、下着も靴下も丁寧に洗われて浴室内のハンガーに整然と吊るされているのです。一瞬、狐につままれた思いがしました。

私はすぐにフロントに電話して、私の部屋の掃除係と日本語通訳に部屋に来てもらうよう依頼しました。私の下手な英語の説明に、何かと不安げなフロントの係員。

五分もたたないうちに、金モールをあしらった軍服のような制服を着た女性の日本語通訳が、おっとり刀で私の部屋にやってきました。六十歳をとうに過ぎて見えるメイドさんが後ろに従っています。

私は扉を開けて二人に洗面室のなかを見せ、

「これはあなたが洗濯して干してくれたのですか」

そのメイドさんに尋ねました。

メイドさんはおびえたように下をうつむいたまま。

「いや、私は苦情を言いたいのではない。その逆なんです」

通訳がやつと意味を理解し、中国語でそれをメイドさんに伝えました。

「私はあなたのご親切にお礼を言いたいと思つて、わざわざ部屋まで来てもらったのです。私は日本はもちろん色々な国のホテルに泊まっていますが、このような親切にふれたことは今までただの一度もありません。ここ青島が初めての体験です」

こう話すと、そのメイドさんはそれまでの伏せ目がちの顔を上げ、晴れやかな表情に変わりました。そして彼女は、掃除のために部屋に入ったとき、洗面台に放置したままの洗濯物を見つけてそれを洗い、ハンガーに吊

るして干したことを早口の中国語で説明し始めました。想像していたとおりでした。

「……私の会社に、もしもあなたのような社員がいたなら、私はきっとその人のことを誇りに思うと思います。どうもありがとう」

そう言って、私は用意していた二十元(約三百円)ほどのチップを彼女に渡そうとしました。すると彼女は、首を大きく振り、両手を後ろに回して頑(かたく)なに受け取るうとしません。もともと中国には欧米のようなチップの習慣はありません。

私は通訳にそれを受け取ってくれよう説得を依頼しました。

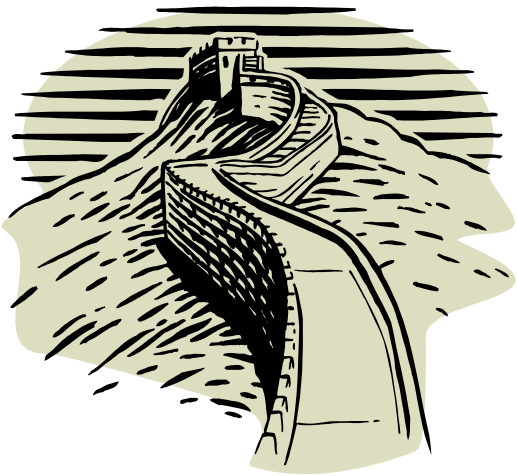
何度かのやりとりの後、このチップでおやつを買って、休憩時間にメイド仲間と分け合うことを条件に、彼女は「シエ、シエ」と何度も礼を言いながら二枚の紙幣を遠慮がちに受け取って部屋を出ていきました。

上海や他の都市に出張経験のある社員から、中国のサービス業者の客に対する粗雑な扱いや、業務における「ホスピタリティ」という概念すら乏しいことを何度も聞かされていた私は、この出来事は想像すら出来ない驚くべきことのように感じました。

経済特区の開発が進み、新興のライバルホテルが次々と建設される情勢での従業員教育の成果、ということもあるかもしれませんが、しかし、あの純朴なメイドさんの様子を見るかぎり、会社の教育やマニュアルに従ったサービスとはとても思えませんでした。社会主義国であろうと、資本主義国であろうと、やはりそれは「人物」、その人柄がなせることなのだと思いました。

以来、彼女はたまに私と廊下ですれ違つと、にこやかな「シエ、シエ」のあとに、片言の日本語で「アリガト」と言ってくれようになりました。

私は彼女の日々の暮らしぶりをのぞいてみたい思いに駆られました。



工事の完工をこの眼で確認し、客先の要人への挨拶をすませて日本に帰国した私は、初めて体験するプラント機械の輸出と海外での工事という疲れもあって、激しい脱力感に陥（おちい）ってしまいました。

価格決定や決済条件はもちろん、基礎実験が始まって、設計、製作、輸送、現地引渡し、そして商品の量産指導が完了するまでの過程を、あらゆる不確定要素とリスクを想定しつつ、時系列に文字化する「契約書」の作成。顧客との交渉の後の度重なる契約条項の修正に神経をすり減らす日々が、春から例年ない猛暑の残る秋まで続きました。国境を越えた商いは、わずかな油断が致命的な損失につながります。

日本へ帰国後、私は数日ぐったり寝こんでしまいました。

そして、書架にあつた山崎豊子さんの史実をもとにした小説「大地の子」を、朦朧（もろろう）としたまま読み返し始めました。

満州（中国東北部）開拓団員の子として生まれ、日本敗戦の際、動乱の極みなかで家族とはぐれて中国残留孤児となった、陸一心（日本名 松本勝男）は、中国の人買いの間を転売されたあげく、運良く拾われた中国人養父母、陸徳志、淑琴夫妻の命がけの慈愛によって成長します。

「小日本鬼子」（シアオーリーベンクウィツ）と蔑（さげす）まれつつ少年時代を送り、折りからの「文化大革命」の思想に凝り固まった党幹部の誤審によつて五年間もの間、内蒙古の草原にある政治犯収容所へ幽閉されます。命の恩人でもあり、後に一心の妻となる看護婦、江月梅や、父親である老教師、陸徳志の職を投げうち、厳寒の北京の路上に数ヶ月にわたつて寝起きしての中央政府への直訴によつて、陸一心は北京政府重工業部への復職がかないます。

やがて日本と中国との国交が回復し、陸一心は一九七七年（昭和五二年）に始動する日本と中国合作による総工費五千億円という、中国の国運をかけた巨大製鉄所・宝華製鉄所を建設するプロジェクトに製鉄技術者として抜擢（たく）されます。

日本側製鉄プラントメーカーの現地責任者として赴任した一心の実父、松本耕次と偶然が重なり、四十年の歳月を経たのち父子は再会します。日本で共に暮らそうと迫る父親。その申し入れを断つて、陸一心は「大地の子」として中国で暮らすことを決意するというストーリーです。

この小説のなかで、日本で製作され、現地・中国に納入された建設用のアンカーボルト（注・一方を地中あるいはコンクリート内に埋め込み建造

物などを固定するボルト）六百トンに錆（さび）が発生するという事件が起こります。

中国側技術責任者、陸一心は、まだ実父とも知らぬ日本側現地責任者、松本耕次に厳しく詰め寄ります。

松本耕次は言います。

「今、錆がどっちの責任であるか追及するより、遅れている工期を取り戻すためにも、今回のアンカーボルトの錆や些細な寸法違いは機能に支障なし、として早急に検査を終わらせ、ボルトを必要とする現場へ渡して戴きたい」

松本はあくまで冷静に云った。陸一心の眼が鋭い光を帯びた。

「……では松本先生に質問しましょう。先生が、上海の南京路で新しいワイシャツを買う時、ワイシャツの裾に汚点（しみ）があると思います。裾はスポンのなかに入れてしまつからと云つて、汚点（しみ）がついているのを、買いますか」

「われわれの云い分は、そこなんです。貴重な外貨を使って、最新鋭製鉄所を造る意気に燃えているわれわれは、いささかの妥協も譲歩もできません。公式の『開梱検査記録』に記述して、上にあげます」

陸一心が云った。

「それがお国のやり方なら致し方ありません。しかし、錆は基礎のコンクリートに埋もれ、ねじ山もナットで充分、締めうる機能があり、何の支障もないことを、後日、理論的且つ実践的に証明してみせましょう」

松本は中国側のクレームに、あくまで平静に説得するように云った。

### 「大地の子」 下巻より

ことし二 八年八月、北京オリンピックピックが中国各地で開催されます。

山東省・青島はヨット競技の会場として、市をあげてその会場準備と建設の槌音（つちおと）に沸いています。

一九七七年十二月五日、小説のなかの陸一心らが精魂を傾けた、宝華製鉄所建設の工程指揮部が発足してちょうど満三十年。中国最初の本格的近代製鉄所の建設が着手された当時、中国政府の持つ外貨準備高はほぼゼロ、もしくはマイナス。そしていま、世界の約四分の一の人口を占め、長い混乱と眠りから覚めたこの巨大な国が保有する外貨準備高は、およそ一兆ドル（百十兆円）に達しています。

山東省西部を流れる黄河流域に黄河文明が弱々しく生まれたのち、秦、漢、魏、隋、唐などの時代から中華人民共和国建国にいたるまで、侵略戦

争と内乱に明け暮れ、近・現代においては、欧州列強や日本に翻弄（ほんろう）された歴史をもつ中国は、二十一世紀初頭において初めて、自主独立・統一をほぼ確立したように映ります。

中国国内で出会う中国人に、私が広島からやって来たことを話すと、彼らのほとんどは一瞬とまどいの表情を見せます。

ある人は、

「ヒロシマにはまだ放射能が町じゅうに残っているのですか？」

と真顔で私に尋ねました。

異民族への侵略や同族が骨肉相食む殺戮（さつりく）と、自国に対する干渉に蹂躪（じゅうりん）され続けた歴史を持つ彼らにとつてなお、日中戦争で味わった苦渋はまだ記憶と体験のなかに新しく、それはヒロシマがこつむつた悲劇と引き換えに清算されるものではないように思えました。

青島経済開発特区での合作事業にあたって、私たちの現地におけるパートナーとして業務全般の後方支援を委託し、献身的な尽力を頂いた、青島衆一佳商務有限公司・総経理（注：代表取締役社長）、張建成氏（四二歳）は、青島の日本語専門学校を皮切りに、通算八年以上の日本語専門教育を受けた日本通です。

彼の幾人かの親族もまた、民間人にもかかわらず日中戦争さなかに日本軍のいわれなき迫害を受けた受難の歴史を背負っています。

以下は私からの便りに対して張建成総経理から届いたメールの一節です。

「（略）中日両国は世界中にも数少ない長い歴史を持っている国であり、賞賛に値される時代もあるし、教訓を吸収する苦痛な歴史の追憶もあります。特に近代時期の侵略戦争で両国の民衆が大きな災難に遭ったという事は深く心に留めている事です。

ですから、『歴史を鏡にして、未来に向かう』という指導者らの指摘は大きな知恵であり、何よりの発展方向だと思われます。中国人の私はその通りと感じております。（中略）過ぎ去った不愉快な歴史の認識に対して、里吉さんの心からの気持ちはとてもよく理解できていますし、尊重に値するものと思います。言われるように、我々一人一人で相互努力しておこなったことが友情の基礎ですね」

そのメールの最後の行はこう結んでありました。

「お互いに仲良くするように頑張りましょう」